

現代における接頭辞「お」「ご」の変遷

鈴木智映子

[キーワード：①接頭辞「お」「ご」②美化語③「これからの敬語」④作文
⑤男女差]

0. はじめに

本稿は、近現代における敬語史研究の一環として、接頭辞「お」「ご」の変遷を取り上げる。鈴木（2000）では、a) 上下関係・身分関係を基盤とした戦前の敬語使用が、戦後、場面に基づいた敬語使用へと変化したこと、b) 場面に基づく戦前の敬語使用では、尊敬語・謙讓語の使用は減少し、対者敬語としての丁寧語が多く使用されること、c) 敬語の「簡素化」が進んでいることを述べた。また、その後の調査において、高度経済成長期の只中である昭和40年頃を境に、敬語使用に大きな変化が現れていることが明らかとなった（鈴木（2002））。

敬語の史的研究については、辻村（1968）、大石（1983）、西田（1998）をはじめとする、多くの先行研究が存在するが、昭和40年代から50年代になされた研究が主であり、通時的研究としてはそれ以降の調査は少ないようである。さらに、国家体制や社会構造の改変をもた

らした終戦によって、敬語規範も戦前から戦後へと一変したが、戦後の敬語意識・規範をめぐる問題を考える上で更に多岐にわたる資料の調査が必要と思われる。

本稿では、接頭辞「お」「ご」(以下「お」)の問題を取り上げ、戦前から戦後への敬語の変遷の様相を明らかにしていきたい。

1. 調査資料について

具体的な敬語使用調査の対象としては、学習院初等科の作文集『小ざくら』を選んだ。敬語意識の変化が、学校教育の場においてどのように反映されるか、また、敬語が皇室に対する語と関連があるということからも、この文集(学習院資料)が敬語変遷調査の一素材として適当であると考えたからである。

『小ざくら』は学習院初等科児童の作文・詩・習字・工作などの作品と初等科の年間行事の記録、教員からの報告を載せた文集である。この文集は大正15年(1926)11月の機関誌創刊に端を発し、現在に至るまで年1回発行されている。

調査対象は、戦前の綴方、戦後の作文とし、詩・和歌・調査文・感想文などは除いた。また、戦前は昭和11年を、戦後は昭和26年を起点に平成8年まで5年ごとに調査を進めることとした¹⁾。

2. 「これからの敬語」

大石(1983)は「戦前の敬語は上下敬語・身分敬語であり、戦後の敬語は左右敬語・社交敬語であるということができよう」と述べてい

る。このような、現代の敬語の変遷を考察する上で、基準となるのが昭和27年5月に発表された「これからの敬語」である。その基本方針には「これまでの敬語は、主として上下関係に立って発達してきたが、これからの敬語は、各人の基本的人格を尊重する相互尊敬の上に立たなければならない」とあり、「できるだけ平明・簡素にありたい」と述べられている。

その中で、接頭辞「お」については「女性のことばでは、必要以上に敬語または美称が多く使われている（たとえば「お」のつけすぎなど）。この点、女性の反省・自覚によって、しだいに純化されることが望ましい。」との記述があり、「「お」「ご」の整理」という項目を立てて、指針を打ち出している²⁾。

3. 戦前から戦後への「お」使用の変遷

3.1 概観

【表1】と【図1】は『小ざくら』に現れた「お」使用の推移を示したものである。【表1】を見ると、延べ語数、異なり語数共に昭和31年をピークに減少していることがわかる。

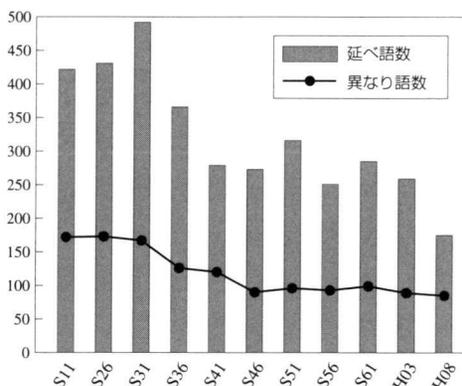
延べ語数は、昭和30年代に激減しているが、その後、およそ250語から315語を上下し、平成に入るまで大幅な減少は見られない。さらに、平成に入ると再び減少傾向が見られる、平成8年には男子の延べ語数80語、女子95語と男女差が最も縮まっていることも注目に値する（後掲【表4】参照）。

また、異なり語数に関しては、昭和31年から36年に167語から126語へ激減し、延べ語数と同様の変化を見せている。その後46年には

表1 「お」使用数の変化

	延べ語数	異なり語数
S11	422	172
S26	431	173
S31	492	167
S36	366	126
S41	279	120
S46	273	90
S51	316	96
S56	251	93
S61	285	99
H03	259	89
H08	175	85

図1 「お」使用数の変化



100 語以下へと減少しているが、それ以降はほとんど変化が認められない。

3.2 戦前の「お」使用

社会の民主的变化に伴って敬語のあり方が変わる、つまり、待遇表現の要素である敬語が社会の人間関係の変化に強く影響されることは、当然であるといえよう。

戦前と戦後では敬語使用も劇的な変化を遂げることになるが、接頭辞「お」の使用に関してはどのような点で違いが見られるだろうか。

結論を先に述べるならば、以下の二点にまとめられる。

- a) 戦後、尊敬語としての用法が減少し、美化語としての用法が主流となる。
- b) 戦前に見られた男女差がなくなる。

3.2.1 「お」の美化語化

接頭辞「お」の用法には、尊敬語としての用法、謙讓語としての用法、美化語³⁾としての用法がある（国研 1992）⁴⁾。【表 2】は、『小ざくら』に出現した「お」を尊敬語と美化語に分類したものである。

表2 「お」の分類（延べ語数）

	尊敬語	美化語	計
S11	67	355	422
S26	57	374	431
S31	28	464	492
S36	12	354	366
S41	4	275	279
S46	4	269	273
S51	5	311	316
S56	10	241	251
S61	0	285	285
H03	5	254	259
H08	5	170	175

まず、尊敬語の使用を見ると、戦後すぐ、昭和 26 年では 431 語中 57 語と全体の 13% を占めているものの、31 年、36 年と減少し、41 年以降では尊敬語としての用法はほとんど認められない。

戦前と戦後の「お」使用において明らかに異なる点は、戦後、尊敬語としての使用がほとんどなされなく

なり、現代では多くが美化語として用いられる傾向にあると言えよう。

また、戦前は尊敬語としても美化語としても用いられていた語が、戦後は美化語としてのみ使用される語も見うけられる。その一例として、戦前から現在に至るまで広く用いられている「お話」という語を取り上げて考察してみたい。

- (1) 江淵大尉が出ていらつしやつて、鳩が通信に使用される種々の場合について御話をなさつた後、……。(['おたより']⁵⁾ 昭和 13 年)
- (2) 消防組合の人や村山先生にお話をうかゞつて、今度は別の道を通つてケーブルカーの乗場に着いた。(['小ざくら』 昭和 11 年)
- (3) それなのに、鈴木先生のお話をうかがつてがつかりした。(['小ざくら』 昭和 26 年)

- (4) じょうずにできるか心配で校長先生のお話などあまりよく聞けなかった。(『小ざくら』昭和56年)
- (5) そこで、いまい先生のおはなしをきいてから、どんぐりひろいをしました。(『小ざくら』平成8年)

上記の『おたより』の例や『小ざくら』の昭和11年、26年の例では「出ていращやる」「うかがう」といった尊敬語、謙讓語が共に使用されていることから、「お話」にも尊敬の意が含まれていると推察できる。それに対し、昭和56年、平成8年の例においては、他の箇所でも先生に対し敬意表現は用いられておらず、動作主に敬意的配慮を示す尊敬語としての用法の「お話」が美化語化していると推察できる。他にも「ご説明、お声」といった語でもこのような傾向が認められている。

国研(1983)の調査結果によると、昭和27,28年に比べて47年では、美化語の「お」や丁寧語の「ます」を敬語形式だと意識しない人が増えており、40年代以降、「お」の主な使用は敬意的配慮を含まない美化語であることが明らかになっている。

3.2.2 敬語使用の男女差

戦前の敬語使用を考察する上で、男女のことばの違いは大きな要素であるが、戦前の初等科は男女別学であったため、『小ざくら』に掲載されている作文も男子の作文のみであり、【表2】に挙げた昭和11年の数字は、男子のみの調査結果となっている。そこで、女子との比較を行うため、女子学習院で発行された『おたより』の中に掲載されている児童の作文を用いて調査を進めることとした。『おたより』は大正9年(1920)～昭和19年(1944)に学校と家庭との連絡を緊密にするため

に発行されたもので、内容は教育の状況・行事・職員学生の動静などを掲載したものである⁶⁾。

表3 戦前の「お」使用数(延べ語数)

	尊敬語	美化語	計
男子	67(22)	355	422
女子	335(148)	336	671

※尊敬語中皇室に対する使用を()で示す。

表4 「お」使用の男女差(延べ語数)

	男子	女子	計
S11	422		422
S26	181	241	431
S31	197	295	492
S36	138	227	366
S41	110	162	279
S46	88	184	273
S51	116	200	316
S56	110	144	251
S61	83	202	285
H03	76	182	259
H08	80	95	175

【表3】は『小ざくら』と『おたより』に出現した「お」を尊敬語と美化語とに分類したものである。美化語の使用について顕著な男女差は見られないものの、尊敬語では女子の335語に対し男子の67語と、圧倒的に女子の尊敬語使用が目立っている。

それでは、戦前の尊敬語使用の実態はどのようなものであったのだろうか。まず、以下に『おたより』中に出現した尊敬語的用法を全て示しておく⁷⁾。

『おたより』に現れた尊敬語的用法の「お」

〈皇室に対する使用〉

御池・お池、御馬、御刀、御着物、御車寄、御式、御品、御印、御硯箱、御建物、御たんす、お力、御茶屋、御机、御造り、御二階建、御庭、お墓、御始め、御話、御二柱、御水屋、御導き、御召物、御休所、御あと、御思召、御趣、御事、御三十歳、御品々、御為、御徳、御年・御齡、御共、御野立所、御身、御もやう、御愛讀、御愛用、御遺物、御苑、御製、御遺蹟、御英姿、御外出、御下賜、御下問、御居室、御苦心、御軍刀、御軍服、御缺席、御在世、御事蹟、御質素、御社殿、御所、御書物、御寢室、御盛典、

御聖徳、御先着、御造營、御調度、御等身大、御身分、御無念、御紋章、御用掛、御養蠶(所)、御禮服、大御心、御世
お痛はしい、おたのしい、お凜々しい、御自ら、御一緒

〈皇室以外に対する使用〉

お居間、お顔、お玄關、お聲、お住居、お姿、お世話、御靈屋、御手紙、お庭、おはなし、お部屋、お骨折、御禮、御棚、御遺物、御挨拶、御案内、御一緒、御引率、御苦勞、御厚意、御厚志、御厚情、御講和、御説明、御都合、御病氣、御本殿、御冥福、御養生、御門、御靈
おかわいそう、お苦しい、お元氣、おさびしい、お小さい、おやさしい、およろしい、おわるい

- (6) 明治天皇の御愛用の御机、御愛讀の御書物、廣島の大本營で御使用あそばされた御たんす、その他尊い御遺物の數々を拜觀いたしました。(中期1年)⁸⁾
- (7) 先づお玄關、次に應接間、(乃木)大將のお居間、御じゆん死遊ばされたお部屋、婦人のお居間など……。 (前期4年)
- (8) 淳子さんが、急な御病氣でおなくなりになつたといふのです。…「ごきげんよう。」とにこにこしたお顔をお見せになりさうな氣がしてなりませんでしたがけれど、……やつぱりおいではなりませんでした。……どんなにおさびしかつたでせう。どんなにお苦しかつたでせう。(前期4年)

皇室に対する表現が多く見られるのは、使用している作文資料が学習院のものであることと、更に重要な要因として、戦前の規範としての敬

語は、皇室崇敬を中心とするもので、上下の分を言語的に示すためのものであったということである。【表3】の尊敬語において、男子では22語(32.8%)が、女子では148語(44.2%)が皇室に対しての敬語使用である。

下記に示した表は、『小ざくら』『おたより』に見られた尊敬語と謙譲語をまとめたものである。(『おたより』の尊敬語全体のうち、皇室に対する使用は68語(13.5%)、謙譲語では114語(32.3%)となっている。)

表5 『小ざくら』の尊敬語

お…になる	55
お…なさる	2
お…くださる	2
お…だ(です)	0
お…あそばす	5
…なさる	2
…あそばす	2
…ていらっしゃる	48
…てくださる	44
…(ら)れる	13
合計	173

表6 『おたより』の尊敬語

お…になる	116
お…なさる	2
お…くださる	72
お…だ(です)	0
お…あそばす	42
…なさる	9
…あそばす	16
…ていらっしゃる	52
…てくださる	80
…(ら)れる	113
合計	502

表7 『小ざくら』の謙譲語

お…申し上げる	6
お…申す	0
お…する	34
お…いただく	0
お…いたす	1
…ていただく	33
合計	74

表8 『おたより』の謙譲語

お…申し上げる	75
お…申す	1
お…する	58
お…いただく	21
お…いたす	14
…ていただく	184
合計	353

つまり、接頭辞「お」に見られる男女差は、そのまま文全体の表現においても同様であり、戦前の女子の文章の丁寧さが伺える。上記の表の

結果からも、女子の尊敬語では「お…あそばす」「…あそばす」「お…くださる」、謙讓語でも「お…申し上げる」といった高い敬語形式が用いられている。

当時の敬語は身分や階級を表すものであった。徳川義親『日常礼法の心得』（1939）の言葉遣いの項には「日本語は目上に対する場合、同輩に対する場合、目下に対する場合といふやうに、階級によつて言葉が違ふ」と述べられ、身分に応じた使い分けが求められていた。

さらに、昭和17年（1942）の国定教科書『初等科国語巻七』（国民学校第六学年前期用）の第四課「敬語の使ひ方」の中では、「いつぱんに、女は男よりもいつそうていねいにものをいふのが、わが国語のならばである。（中略）「行く」「来る」を「いらつしやる」といふなども、女らしいことばである」と書かれている。

「言葉遣い」の礼法とは、社会的上下関係と性別的役割関係に、国民を統合する目的から作り出されたものであり、男女の区別も敬語の使い分けの中に組み込まれていたとすることができるだろう。

3.2.3 戦前の美化語

前述のように、戦前の美化語の使用数においては、男女の違いは特に認められなかった。出現した異なり語数は『小ざくら』115語、『おたより』91語となっており、出現頻度の高い語については、後述する戦後の美化語と同じような語が用いられている。

『おたより』のみに見られるもの、つまり、戦前の女子特有の美化語としては以下のような表現が出てきている。

おかぜ、おさほう、お字、おしたく、おじゃま、お刷物、お楽しみ、

おだめ、お昼食、おもてなし、お役所、お列

- (9) 又あのきれいなお字が學級日誌に書かれることも永久にないかと思ふと、淋しい氣がいたします。(前期4年)
- (10) 巴合戦の時など、よく彈丸のやうにとんでいらして、「お駄目。」とお打ちになり、勢よく旗をお振りになりました。(前期4年)
- (11) 學校で頂いた地圖ともう一枚のお刷物をひろげ、手帳と鉛筆を持っていろいろ見くらべたりして居た。(前期4年)
- (12) 櫻田門外のお堀端で自動車を下りた私どもは、お列を整へて御門を通りました。(前期4年)

なお、『小ざくら』での学年による使用差については、低学年での使用が多く認められた。1、2年生は90語前後（延べ語数。以下同様）、3～5年生では60語前後となり、6年生になる18語と急激に使用が減少している。これは、低学年では敬体が多く、高学年では常体が多く使用されていることとも関連があると推察される⁹⁾。『おたより』に関しては、作文中の学年が均一でないため、顕著な学年差は見られなかった。

3.3 戦後の「お」使用

昭和26年から平成8年の間、美化語は345語（異なり語数）出現している。出現頻度の高かった語を以下にまとめる。

出現頻度の高い美化語

〔11回〕 ※昭和26年から平成8年まで全ての年に一語以上出現したもの。

おうち、おかけ、おかし、おきゃく、おともだち、おなか、おはなし、おひる、おふる、おべんとう、おまいり、おみやげ

〈10回〉

おいしゃ(さん・様)、おいのり、おかね、おしょうがつ、おそうじ、おてつだい、おねがい、おもち、ごはん

〈9回〉

おしよくじ、おてら、おにわ、おほか、おまつり、おみせ、おやすみ

〈8回〉

おいも、おけいこ、おしり、おぞうに、おつかい、おてんき、おはな、おひさま、おやつ、おれい、おわかれ、ごあいさつ

〈7回〉

おさかな、おさら、おじぎ、おしまい、おしゃべり、おしろ、おせわ、おとそ、おぼうさん、おまもり、おみくじ、おみず、おむかえ、おゆ、おりょうり

〈6回〉

おいわい、おこづかい、おこめ、おさいせん、おすし、おたんじょうび、おとしだま、おなべ、おやま、ごちそう

四角で囲った語は、「お」が付いた形でしか出現しないもの、すなわち、慣用的な語である。また、網掛けの語は、「お」の付かない形でも作文中に多く出現しているもので、「これからの敬語」の「(2)省けば省ける場合」にあたる。

これに対し、昭和31年を頂点とした美化語使用のピークである30、40年代を過ぎると、使用されなくなる語も見受けられる。

昭和 41 年以降使用されなくなる美化語

〈学校でのことば〉

おかきぞめ、お給食、お教室、お時間、お試験、お授業、お宿題、お席、
お帳面、お道具、お当番、おのこり

〈家に関することば〉

お勝手、お蔵、お玄関、おざしき、お台所、お茶の間、お二階、おやしき

〈食べ物に関することば〉

おこな、お塩、おす、おそば、おつゆ、おなす、お豆、おまんじゅう、お
みかん、おみそしる、おむすび

おしゃじ（匙）、おしゃもじ、おちゃわん、お三時、お毒味

〈その他〉

お相手、お遊び、お池、おかざり、おかつぱ、お国、おさかもり、おさら
い、おしかり、おせんべいぶとん、おぞうきんかけ、おたすけ、おだちん、
おたより、お注射、おてんば、お電話、お荷物、お寝坊、お年賀状、お年始、
お彼岸、お人好し、お病氣、お返事、おまわり、お留守、ご年賀、ご年始、
ご本、ご用

下線を引いた語は、別の言葉に変わってきているもので、語彙自体が
現在では使用されていないものである。例えば「帳面→ノート」「お三
時→おやつ」「おだちん→おこづかい」「おさらい→復習」などが挙げ
られる。

「昭和 41 年以降使用されなくなる美化語」に出現する網掛けの語は、
現在「お」の付かない形で出現している語である。いわゆる美化語接頭
辞「お」の多用と言われるのはこれらの語であり、「これからの敬語」
の「(3) 省くほうがよい場合」にあたる。

柴田 (1957) の調査では、「お」がつきやすいことばは「家の道具・食するもの・食事・心の働き・感情・体の働き」であり、「女性の日常生活であまり使わない語にはつきにくい」とあり、本調査でも同様に「家に関することば」「食べ物に関することば」が多数表れている。さらに、「これからの敬語」で指摘された「学校用語」にあたる、「お給食、お教室、お授業、お宿題、おかきぞめ」等も少なからず使用されている。これらは、やはり女子の使用が多く、男子の約2倍の使用が認められた。

「これからの敬語」における「「お」「ご」の整理」以来、美化語の「お」に関しては、いろいろな意見が出されているが、NHKでは1960年代に放送での「お」の乱用を注意して、一語一語について、「お」をつけてよいかどうかの基準を定めている。

本調査では、昭和40年前後を境に美化語接頭辞「お」使用の減少が明らかとなったが、「お」使用に対して、教師や親から何らかの指導があったことも十分推察される。新聞や雑誌等メディアでの言論も含め、学校教育の場においてどのような指導がなされていたか、今後の課題としたい。

4. おわりに

本稿では、現代の接頭辞「お」の変遷についての考察を行った。その結果は、以下の2点にまとめられる。

- ①戦前は上下関係、身分関係を基盤とした敬語使用が行われたのに対し、戦後は固定的な関係ではなく、場面に基づいた敬語使用が行われている。したがって、「お」に関しても、尊敬語的用法は減少し、美化語的用法が増加している。

- ②戦後の美化語使用については、昭和30年代にピークを迎える。筆者の以前の調査では昭和40年を境に尊敬語・謙譲語の使用が大幅に減少することが明らかとなっている（鈴木2000）。現代の敬意表現の変遷を考えるにあたり、昭和40年前後を境に大きな変化が見られると推察できるのではないだろうか。

注

- 1) 各年103～104頁を調査に用いた。なお、学年毎の使用頁数はほぼ均一である。
- 2) 「これからの敬語」
 4. 「お」「ご」の整理
 - (1) つけてよい場合（略）
 - (2) 省けば省ける場合
女性のことばとしては「お」がつくが、男子のことばとしては省いていえるもの。
たとえば、
「お」米 「お」菓子 「お」茶わん 「お」ひる
 - (3) 省くほうがよい場合
たとえば、
（お）チョコッキ （お）くつした （お）ビール
（以下略）
 9. 学校用語
 - ①幼稚園から小・中・高校に至るまで、一般に女の先生のことばに、「お」を使いすぎる傾向があるから、その点、注意すべきであろう。
たとえば、
（お）教室 （お）チョーク （お）つくえ （お）こしかけ （お）家事
- 3) 「美化語」の定義については辻村（1967）に従い、「表現素材を美化する言い方。普通丁寧体といわれるもの。対者を意識して用いられることも多いが、必ずしもそうでない場合もある」とする。
- 4) 本調査に現れた謙譲語の用法は少数のため、今回は除外し、尊敬語と美化語の「お」を考察の対象とした。また、「お…になる」「お…あそばす」「お…する」

等の形式も考察の対象外とした。

- 5) 『おたより』については3.2.2参照。
- 6) 『おたより』で使用した作文は昭和11年から13年の作文である。使用頁数は昭和11年の『小ざくら』に従った。
- 7) 『小ざくら』のみに出現したものを以下に示す。なお、語形は出現したままの形式で示してある。
〈皇室に対する使用〉御位、御心、御在學、御上陸、御親筆、御即位、御誕生、御同級
〈皇室以外〉お心づくし、御考案、御手料理
- 8) 女子学習院の学年は、前期1-4年、中期1-4年となっており、前期は男子の初等科1-4年、中期は初等科5-6年、中等科1-2年に対応している。
- 9) 昭和11年の『小ざくら』では、敬体66名、常体76名であった。常体使用者76名の内訳は5年28名、6年23名と過半数を占めている。

参考文献

- 遠藤織枝 (1997) 『女のことばの文化史』学陽書房
大石初太郎 (1983) 『現代敬語研究』筑摩書房
菊地康人 (1994) 『敬語』角川書店
国立国語研究所 (1957) 『敬語と敬語意識』秀英出版
国立国語研究所 (1983) 『敬語と敬語意識 岡崎における20年前との比較』三省堂
国立国語研究所 (1986) 『社会変化と敬語行動の標準』秀英出版
国立国語研究所 (1992) 『敬語教育の基本問題 (下)』大蔵省印刷局
柴田武 (1957) 「「お」の付く語・付かない語」『言語生活』70号、筑摩書房
鈴木智映子 (2000) 「小学生作文にみられることばの変化」『学習院大学国語国文学会誌』43号
鈴木智映子 (2002) 「作文資料に見られる敬意表現の変遷—昭和前期から平成まで—」(語彙・辞書研究会第22回研究発表会予稿集)
田中章夫 (1972) 「「オ」のつくことば・「ゴ」のつくことば」『国文学解釈と鑑賞』465号 至文堂
辻村敏樹 (1967) 『現代の敬語』共文堂
辻村敏樹 (1968) 『敬語の史的研究』東京堂出版
辻村敏樹編 (1971) 『講座国語史5 敬語史』大修館書店
徳川義親 (1939) 『日常礼法の心得』実業之日本社
西田直敏 (1998) 『日本人の敬語生活史』翰林書房

三宅武郎 (1944) 『現代敬語法』 日本語教育振興会

付記

本稿は、第 22 回語彙・辞書研究会 (2002 年 11 月 30 日 於三省堂文化会館) における口頭発表の内容をもとにまとめたものです。席上また本稿を執筆するにあたり、多くの御教示を賜りました。心より感謝申し上げます。

Historical Changes in the Use of the Polite prefix “*o-go-*”

SUZUKI, Chieko

The outcome of WWII affected not only the Japanese political system and social structure but the use of the language, including honorifics. This paper investigates the polite prefix *o-go-* used by schoolchildren in their compositions and discusses how the newly emerged language norm influenced the ways in which members of the community used honorific expressions.

The survey yielded the following observations:

i) In prewar days, the use of honorifics was based strictly upon fixed hierarchical relationships. The usage became more context/scene-sensitive after the war, e.g., the prefix *o-go-* was utilized more often to soften or “beautify” the image of the word modified (*bika-go*) and less frequently to show respect (*sonkei-go*).

ii) The frequency of use of *bika-go* peaked during the Showa 30s (1950s-60s). In view of another fact that the employment of *sonkei-go* and humble words (*kenjo-go*) drastically decreased after Showa 40 (1965) (see Suzuki 2000), it seems reasonable to suppose that significant changes took place in the use of honorific expressions around Showa 40.

(人文科学研究科日本語日本文学専攻 博士後期課程 3 年)